

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	末野 孝典
論文題目	北・西アフリカにおけるイブン・アラビーの言説的伝統 —思想的源泉としてのムハンマドに焦点を当てて—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、アフリカ哲学を構成する一要素であるにも拘わらず、長らく等閑視されてきたイスラームの哲学に焦点を当てるために、イスラーム思想上「最大の師」とも称される思想家イブン・アラビーを軸として設定し、北・西アフリカにおける彼の思想伝統を解明することを目指すものである。本論文は、6章からなる本文と序章・終章で構成されている。</p> <p>第1章では、本論文の核となる神秘思想家イブン・アラビーと、後代においてイブン・アラビーから思想的影響を受けたとされる思想家たちについて整理する。特に、従来の研究で本格的に論じられることがなかった、北・西アフリカにおいて活躍したイブン・アラビー思想の後継者たちに力点を置くことで、将来の研究の素地を広げるための見取り図を描くことを試みる。</p> <p>第2章では、後代におけるイブン・アラビー思想の影響網を描き出すための理論的視座を提供する。イブン・アラビー思想を受け継いだ思想家について言及する際に研究者のあいだで頻繁に利用されてきた「イブン・アラビー学派」という用語が孕む問題について検討し、単一かつ共通の思想基盤を有する集団という含意をもつことを批判する。そのうえで、人類学者タラル・アサドの〈言説的伝統〉概念を援用し、「イブン・アラビーの〈言説的伝統〉」という概念を提唱する。この概念を通して彼の思想伝統を、一枚岩的な集団としての「学派」でなく、さまざまな思想家が各々の判断に基づきながら、イブン・アラビーの思想を学び身体化することで、彼の独特な思想を解釈・批判する現象としてとらえ直すことを試みている。</p> <p>第3章では、イブン・アラビーの言説的伝統を考察するための基礎的作業として、彼の代表的な理論のひとつと見做される〈ハキーカ・ムハンマディーヤ〉(「ムハンマド的眞実在」)概念を考察する。イブン・アラビーだけでなく、クーナウィー、カーシャーニー、カイサリー、ジーリーなどの初期のイブン・アラビー思想の後継者たちも対象に含めてこの概念を分析することで、通時的な意味の変遷を捉えている。</p> <p>第4章では、モロッコ出身の神秘思想家イブン・アジーバが、「一握り」を意味するカブダという語を自らの思想の鍵概念とすることに着目し、イブン・アラビーの存在論的宇宙論との思想的連関性について考察する。イブン・アラビーが、必然存在者である神以外の可能的存在を創造する場だけでなく、宇宙や人間を発出する場として</p>			

この語を用いたのに対し、イブン・アジーバはその宇宙論において、絶対者が自らの存在を顕す受容体として描いていることを指摘する。

第5章では、セネガル出身の神秘思想家イブラーヒーム・ニヤースが、第3章で取り上げた〈ハキーカ・ムハンマディーヤ〉概念についてどのように論じているのかについて考察する。彼が〈ハキーカ・ムハンマディーヤ〉概念を、宇宙の発出原理としての意味と宇宙の統合原理としての意味という二つの視点から論じていることを明らかにする。

第6章では、スーフィズムの術語のひとつであり、聖者の階層の頂点に位置する者を指し示す〈極<sup>きよく</sup>〉（クトゥブ）の語が、イブン・アラビー思想において人間の原型を示す〈完全人間〉の役割を担うことを考察する。北・西アフリカの複数の思想家を取り上げ、彼らがイブン・アラビーの思想に基づきつつ、〈極〉が世界を統治する役割を担い、〈完全人間〉もまた世界の安定を司る役割を担っており、両概念を互換可能な術語として使用する傾向があることを明らかにする。

本論文は、以上の論述を通して、これまでの「イブン・アラビー学派」研究が東方イスラーム世界に偏っていた状況を打破し、北・西アフリカを含む「イブン・アラビーの言説的伝統」という見取図を新たにスケッチして描き直すことを試みている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、イスラーム思想のアフリカにおける展開を、一次資料に基づいて丹念に読み解くことにより、これまでの研究の間隙を埋めようとする意欲的な研究である。筆者は、イスラーム思想の代表的人物とされるイブン・アラビー（1240年没）の思想的系譜を、北アフリカおよび西アフリカにおいて辿ることで、アフリカ研究・イスラーム研究双方に新しい視野を提供している。

本論文の学問的貢献の第1は、アフリカ哲学に関する新しい研究分野を開拓したことである。アフリカ哲学を構成する要素として筆者は、(1) 民族哲学(ethnophilosophy)、(2) イスラーム思想、(3) 汎アフリカ主義的政治哲学を挙げているが、本論文は、このうち従来等閑視されがちであった(2)に焦点を当て、北アフリカのイブン・アジーバ（1809年没）、西アフリカのイブラーヒーム・ニヤース（1975年没）の著作を中心に検討を加えている。

学問的貢献の第2は、北アフリカと西アフリカを一体のものとしてとらえる新しい地域像を構想した点である。北アフリカ研究とサハラ以南アフリカ研究はこれまで、ともすると切り離され、別々に展開されてきた。サハラ砂漠を南北につなぐ交易路などの存在はすでに指摘されているが、思想研究の立場から、同じ思想潮流をもち、連続性・一体性をもつひとつの地域として、北・西アフリカを描き出した功績は大きい。

学問的貢献の第3は、イスラーム思想研究の空白地帯を埋めたことである。イブン・アラビーの知的影響力は、イスラーム世界全体に及んでいるとされているものの、従来の研究はアラブ・ペルシア世界を中心に展開されてきた。その後、トルコ・南アジア・東南アジア・中国などが研究の俎上に載せられるようになったが、サハラ以南アフリカにおけるその系譜は、中央アジアにおけるそれと並んで、まったく明らかにされていなかった。本論文は、この思想的系譜が当該地域で連綿と受け継がれてきていることを、初めて明らかにしたものである。

学問的貢献の第4は、先行研究の少ない研究領域で、直接一次資料を博搜して立論している点である。13世紀から20世紀までに書かれたアラビア語の原典資料数十点を、幅広く丹念に読み解いたことは、文献研究として高い評価に値する。二次資料や翻訳の存在しない原典資料を読解するためには、語学（この場合はアラビア語）の知識にくわえて、イスラーム思想に関する十分な知識を必要とする。本論文は、その点でも遜色のない成果を挙げている。

学問的貢献の第5は、これまでほとんど疑問符を付されることのなかった「イブン・アラビー学派」という概念を検討し、これに替えて新しく「イブン・アラビーの<言説的伝統>」という概念を提唱したことである。「学派」は一枚岩的な集団とし

て理解されることが多いが、この場合、学派の境界線をどこに引くかというアポリアが常に付き纏う。新しい概念によって、これを乗り越えるとともに、イブン・アラビーの思想を肯定的に受容した人々と批判的に受け継いだ人々、知識人と一般民衆を一つの概念のなかで扱えるようになった。

以上のように、本論文は、アフリカ研究で等閑視されてきたイスラーム思想を明らかにするとともに、イスラーム研究で軽視されてきたアフリカ地域の状況を明らかにすることによって、アフリカ地域研究にもイスラーム世界論研究にも寄与するものである。よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年8月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。